

※とはち通信

長崎西南部の史跡・名勝・天然記念物等の紹介通信

第 12 号

※一説によると、かつて長崎西南部一帯を総称して戸八ヶ浦（とはちがうら）と呼ばれた時期がありました。現在、この名は存在しませんが、長崎西南部に対する尊敬の念をこめてこのようなタイトルをつけてみました。
二〇〇九年七月一日 落矢八郎

戸町神社

戸町神社は戸町トンネルの南側出口の東斜面に位置します。かつては「杉浦神社」と呼ばれていたようですが（この杉ノ浦は中世によくでてくる名称で、戸町氏・深堀氏の領土争いで登場する地名です）。現在、杉浦神社の名はごく一部の方しか知りません。知っている方は戸町通です。

一八八五（明治十八）年の『西彼杵郡村誌』や一九三七（昭和十二）年の『長崎市史』を読むと、この地の字は「山の上」と表記されています。山の上に神社があったから、そのような字がついたのでしょうか？ 知っている方は是非教えてください。戸町神社の沿革は『長崎市史』に掲載されているので、ここで引用してみます。
「寛永三年長崎奉行の水野河内守の命に依りて此の浦に保食大神勧請し松尾神社と唱へ現在の地壹反五畝歩を開墾して社地に當て浦（戸町村）の鎮守社と崇めた、當時當地は大村領で人煙希薄漁舎農家僅かに所在に點在せしのみで誠に寂寥の一區に過ぎなかつた。

夫れで専職の神主もなく二月初午と霜月の八日とに至れば村人等打集り轡を建て酒饌を奉じて心許りの祭禮を営みつゝ時代を経て明治維新に及んだ。」

戸町神社は一六二六（寛永三）年、杉ノ浦に保食大神を勧請して松尾神社としたのが始まりで、その後、現在地を開拓してここを鎮守の社としました。が、専属の神主さんはいなかったみたいです。この周辺は「寂寥の一區」と表現されているように人口が少ない半農半漁の村だったので。戸町浦は現在、国道より東側は埋め立てられていますが、かつては入江が存在したと思われ、周辺部を散策すると、確かに埋め立てた痕跡がありました。おそらく、戸町郵便局付近までは入江が存在した可能性が高いでしょう。この辺りまで入江があったとすれば、戸町神社は入江の中間の地に位置することになり、神社の下には海があったことになり、神社の周囲には海があったことになり、神社の名を松尾神社から戸町神社へと改名しました。このことは一八七〇（明治三）年の当社明細帳に

記載されているようで、「戸町神社」の名称はこの時から始まることになりました。明治の世に移り戸町神社は社殿の改築や神輿の新調などを行い、神社の拡大をはかってきました。次に社有地に関する興味深い記事があったので説明します。

一九〇九（明治四十二）年に戸町神社の基本財産として、下郷字舟津・同山ノ上・同川頭の宅地、同川頭山林、同氏無原野、同魚見岳原野、同米ノ山原野、同城平宅地を購入されたそうです。戸町神社の社有地として興味があるのは勿論なのですが、やはり、ここで注目することは字名だと考えます（個人的なことですが、みなさん、現在、戸町地区の字は使用しておらず戸町一丁目から五丁目の住所表記になっています。したがって、これらの字を聞いてもみなさんは何処かわからない筈です。確実ではないのですが、おおよその場所はわかるので説明させていただきます。舟津はおそらく国道から戸町一丁目にかけての通りで

はないかと思われ、地元の方の一部は「ハトバ」の名称で覚えられています。川頭は戸町小学校付近、氏無は魚見岳台場跡の下付近、魚見岳は魚見岳台場跡一帯、米ノ山は魚見岳（現在は魚見山）の奥山に該当します。城平はわかりませんが、戸町三丁目内と思われ、戸町神社は字魚見岳を購入しました。この事実を初めて知った時、私は正直驚きました。また、一九一〇（明治四十三）年には字氏無の一部を女神検疫所に貸与したそうです。残りの土地には松五千本と杉四千本を植林したそうですが、一九一三（大正二）年の山火事でその多くを焼失しました。その後、再び植林を実施したとのこと。現在、国道から魚見岳台場跡を目指してあがると平地があります。ここには黒色に燻された椀瓦の散在をみる事ができます。瓦は椀瓦で特徴として凸面には数条の線が確認されます。江戸時代の瓦にはこのような線は施されないのが特徴で、これらの瓦は

事務局
とはち
●ホームページ
http://www.hochiya.com/にて検索
●メール
hochiya@yahoo.co.jp

明治時代以降の可能性が高いでしょう。つまり、戸町神社が女神検疫所に對し貸与した場所ではないかと思うのです。貸与場所は見張番所だったそうで、実際に話を聞くとここには検疫所の関連施設があったとのこと。明らかに台場とは異なる空間なので、みなさんも一度ご覧になってください。この年は下郷宇舟津に鎮座していた恵比寿社を戸町神社の境内に移転したとされます。これで末社は稻荷社だけでしたが、恵比寿社と併せて二社となりました。

大正時代も明治と同じく発展をしていく時期でした。奉納に関する記事が『長崎市史』にありましたので引用してみます。

「大正六年十二月廿七日 戸町山口由松、池田光三郎は花崗石燈籠壹基を奉納した。即ち當社戸町街路に接する地に建設せしめ従來同位置に在りし鳥居は之を階段中部の位置に移轉した。」

花崗石製の燈籠と階段中部の位置に移轉した鳥居は現在もその姿を確認でき、このほか多くの奉納された石製品をみる事ができます。戸町神社が地元の人々から如何に信仰を集めていたかを物語る資料といえます。今回は戸町神社を紹介してきまし

た。当社は江戸時代を起源とし、現代まで多くの人々の信仰を集めてきました。幕末から明治にかけての古写真（長崎大学付属図書館蔵）には戸町浦の写真が数多く残されています。戸町神社の東側の旧道を登った峠から撮影されたものですが、フレームの右側はすべて戸町神社が写っています。拝殿などの建物はみえませんが、神社境内の木々がはつきりと写っているのです。おそらくクスの大木かなあと思うのですが、今現在、境内にはクスの大木が存在しますが、これは当時の写真の木なのかな、と思います。今では戸町神社付近一帯は住宅地と化してしまいましたが、ここは旧戸町村の移り変わりを静かにみてきた場所なのだと実感しました。この場所は「戸町の杜」といっても過言ではなく、周辺の住宅地とは対称的に緑があります。「戸町の杜」がいつまでも続くことを願っています。(文責 落矢八郎)

【引用・参考文献】
 ・福田忠昭ほか 一九三七「戸町神社」『長崎市史』長崎市役所

【次号について】
 次号は女神について話をさせていただきます(二ヶ月または三ヶ月後に刊行予定です)。



写真1 戸町神社鳥居近景



写真2 戸町神社階段 (奥は拝殿)



写真3 戸町神社拝殿 (昭和初期、長崎市史 1937)